



同志社人物誌 (39)

魚 木 忠 一

山 崎 亨

誠実な教育者

大学の教授に求められるものは、その専門分野において秀でた学者であり、世に貢献する研究者であることと共に、学生に対して誠実な指導に当るよき教育者であること、この二つであると思う。この二つを兼ね備えた人物は少なくないが、魚木忠一教授はその中に

数えられる資格を持っていた。

魚木先生は少年の頃から苦勞しながら學業生活を続けた。それは自分のためでなく、長男として家業を通して父上を助け、弟妹に普通高等教育を授けるために、昼間は労働をし夜学に通った。その学校は松山夜学校であって、規模こそ小さかったが、キリスト教主義の教育を強く打ち出した学舎で、西村清雄先

生という大人物が校長をしていた。魚木青年はここで人格的修練を受け、弟妹が一人前に成長したのちに、同志社大学に來たが、文部省の學則上、止むを得ず選科生として入学した。

苦勞した人物こそが、他人の苦勞を高く評價する。のちに同志社大学神學部教授になったときも、アルバイト学生に対して、また胸を患って休學していた学生に対して、常に激励の言葉や勵ましの便りを出していたのは魚木先生であった。先生は「部長」と成って表面に出て行政的手腕を振う人物ではなく、万年教務主任として、カリキュラムのこと、時間割の編成、単位を落とした学生へのアドバース等々、煩雜な業務に誠実に心を配って當っていた。

卒業論文や修士論文を書き上げるに際して、魚木教授を指導教授とした学生は、平均以上の、あるいは他の学生の二倍ぐらいの參考書を読まれた。それほどに學問のことに關しては、魚木教授は嚴格で、融通のきかない教師であつた。彼は自分自身に対してもまことに厳しく、大正十一年同志社大学を選科で卒業したのちに、直ちに渡米してニューヨ

1クのユニオン神学校修士課程に入學し、四年後にマスター・オブ・セークレッドセオロジの学位(神学修士と博士の学位の中間の学位)をマグナ・クム・ラウデ(最優秀)の称号と共に受けた。彼は多くの欧米の学生の中でも模範的な学徒であつた。この時期の魚木を知っている人は、彼を修道僧になぞらえた。その後ドイツに渡り、マールブルグ大学で研究を進め、昭和二年帰国、直ちに同志社大学神学部講師、さらに同五年には教授に進み、天に召された日まで二十七年間を終始一貫して同志社大学における教育に身を献げた。行政面に煩わされて、研究や教育をなおざりにすることのなかつたことは彼にとつて幸いであつた。

昭和二十四年には「基督教精神史研究―カルヴァン神学の精神」(全国書房、昭和二十三年出版)に対して同志社大学より文学博士の学位が与えられた。昭和二十七年より二九年、宗教部長として同志社の立学の精神たるキリスト教の浸透のために努力した。昭和二十九年大下角一教授が大学長に選任されたので、その後をうけて神学部長となつたが、不幸にして五カ月のち脳出血のため逝去された。

学問的貢献

神学の分野は聖書神学、歴史神学、組織神学、実践神学の四部門に分かたれる。魚木教授は歴史神学を自己の学問的領域としたが、この部門では同志社が世に誇りうる立派な学者であつた。

(イ) 思想史的構想

基督教思想の起源および発達を歴史的に記述するために、「基督教思想史」(有賀、魚木共著、昭和九年初版、同二十六年再版)という著作を公けにして思想史的構想を明らかにした。それは教義の発達を追う「教義史」(ガス、一八五四―六七七)のように基督教を教義の範疇に閉じこめることをせず、またフィッシャーの「教理史」(一八九六年)のように教理にのみ重点を置かないために、そして「神学史」をもその中に含めて包括的に「思想史」としてゐる。この構想は有賀、魚木両教授がユニオン神学校で親しく指導を受けたマッギファート博士の代表的著作からの示唆でもあつた。

(ロ) 精神史

魚木教授は昭和二十三年に「基督教精神史

研究」を刊行しているが、「精神史」とした根拠は、(一)基督教自体が教理的哲学的宗教でなく、むしろ「精神的」宗教であること。すなわち「生命的体験を中心として存在する」宗教であること。(二)現状において基督教が教派や分派に分かれていて、その各派が福音の本質を把握していると自負している。その各々について概説したとしても基督教の全体を説明することにはならない。さればといって「基督教の本質」を究明しようとするれば、基督教の流動性を無視し、発展性を止めて静止した形でとらえるという誤謬をおかす。それゆえに「基督教精神の生命的脈動を捉える」ためには精神史的把握と説明が最も適當であつた。

類型

「基督教精神史に於ける類型の生起」は昭和二〇年、基督教研究誌上に発表された論文である。この「類型」はゼーベルグが「教義史」の第二、第三版(一九二〇年)において提示した。この類型論に立つて五編の論文が魚木教授によつて基督教研究誌上に発表されているが、著書としては「日本基督教の精神的伝

統」(基督教思想叢書刊行会、昭和十六年)と前掲の「基督教精神史研究」の二がある。

類型を特に主張した根拠と考えられるのは、救贖史的歴史観に立って基督教精神史を見ると、究極点に向かって進展しながらも、その途上に類型的段階が考えられた。ある民族が、その文化の段階において独特の福音体得や、救済把握をしているからである。

つぎに、時代的、社会的環境の中に傑出した人物たちが存在し、その数人の思想に焦点を当てることによって類型をつかむことができる。そうして考えられた「類型は他の類型と対照されながら、相補いつつ福音理解を深めていく。

類型として挙げられたのは、ギリシヤ、ラテン、ロマ、ゲルマン、アングロサクソン、日本の六個であった。

魚木教授はキリスト教精神史の中で、近世を研究の主題としたので、宗教改革者ルッテルについては、「偉人群像中近世篇」(ヨルダン社、昭和二十九年)に掲載されている「マルティン・ルッテル」の他に、三篇の研究論文が基督教研究誌上に公けにされているが、カルヴァンについては十一篇の論文が基督教研究

誌その他に寄せられた。

類型について述べるならば、カルヴァンはルッテルと共にゲルマン類型の「双峰の代表者」とされている。この類型は福音的基督教の性格に徹したことに特徴を現わし、敬虔類型を代表するものであり、創造者なる神、主権者としての神を神学的特色としたものである。教会形成に信仰的能力が発揮されたが、戦闘的教会と呼ぶのにふさわしい活動をしたと説明されている。

基督教の土着が問題とされたとき、魚木教授の「日本基督教の精神的伝統」は注目をあびた。この著作は日本基督教に個性のあることが強調され、基督教の救贖宗教たる性格を感得した点に特色を見出し、それが仏教を媒介となされたものであること、武士道的滅私的信仰が御利益信仰を超克したと説いている。

* *

同志社一〇〇年に際して、新島襄先生を思うとき、魚木忠一著「新島襄―人と思想」(昭和二十五年初版、三〇年再版、同志社大学出版部発行)に触れたいと思う。この書の序文には「新島先生の如く人間として生きること教えて呉れ

る教師は少なく、先生の如く、人生が愛神の現実性に基づくことを証した教師はない」と述べている。

良き教師であった魚木は、新島襄の良き教師としての姿を正確に把握している。特にこの書の第九章に「宗教と文化」の項が設けられていて、新島襄の内面的思想的成長が説明されている。青年であった新島が、蘭学を通して、始めて「創造者」という語に接し、のちに漢文基督教で「天父」という名称に出会ったこと、「創造者は単なる天や理ではなく、天父であると教えられ」、「直観的な体得と、燃えるような熱情」を自らのものとして、その後の一生を貫いたことが説かれている。

この書の刊行された二年前に、「新島先生に於ける国家思想」なる論文が発表されている(原子力時代に於ける基督教、聖光社)。この中で、憂国の志士の性格を持っていた新島には、幕末志士に見られたような偏狭性がなく、より広い立場から世界を見ていたこと、アーモスト大学長シーリー教授から深い影響を与えられたと見られる点が実証されている。